近世文学と楽器の繋がり

加藤　吾郎

一、はじめに

本論文は、馬琴読本における楽器の役割について考察するものである。馬琴の作品には楽器が描かれることが多く、楽器一つ一つが話の内容と密接な関連を持っている。私見によれば、琴は男性と女性とが出会う切っ掛けをなすものとして、また、笛は不思議な出来事が起こる前兆を示すもの、一般の人間を超越する力を持った人物を象徴するものとして描かれている。本稿では、琴については『椿説弓張月（ちんせつゆみはりづき）』『美濃旧衣八丈綺談（みのふるぎぬはちじょうきだん）』『源氏物語』『風土記』を、笛については『南総里見八犬伝』『新編水滸画伝』『教訓抄』『義経記』『四天王剿盗異録（してんのうしょうとういろく）』『十訓抄』を取りあげ、論じることとする。

二、琴

①『椿説弓張月』

『椿説弓張月』（文化四年〈一八〇七〉～同八年〈一八一一〉刊）、「前篇」「後篇」「続篇」各六巻、「拾遺」「残篇」各五巻。源為朝の活躍を描く、史伝物と呼ばれる馬琴長編読本の初作である。

『弓張月』において琴が描かれる箇所のあらすじは次のとおりである。

源為朝の従者であった武藤太は、主君の為朝を裏切ったことが世間に知れ、都に居ることが出来なくなり、昔の仲間と四国に渡る。当地の神社、琴引八幡宮に参詣すると、琴の音が聞こえてくる。何事かといぶかる武藤太の前に、美女（為朝の妻・白縫）とお付きの少女が現れる。

『椿説弓張月』[1]前篇巻之五、第十二回には次のような記述がある。

武藤太はいまだ四國に遊びし事もあらざれば、このわたり一見せばやとて、ひとりふねよりあがり……観音寺村といふところよりは、二三町こなたに、琴引の八幡宮たゝせ給へり。……道の次に詣ばやと思ひて、彼神社へ赴きけり。……時に海上雲おさまりて、玉兎高く昇、金波潮に映じて、さながら白昼のごとくなるに、高欄のほとりに當りて、忽然と琴の音聞えて

山（やま）越（こし）乃（の）風（かぜ）乎（を）
時（とき）自（し）見（み）寐（ぬる）夜（よ）
不（おち）落（ず）家（いへ）在（なる）妹（いも）
乎（を）懸（かけ）而（て）小（し）竹（ぬ）櫃（びつ）

と万葉集第一に載たる、雄略天皇讃岐国に幸ませしとき、軍王が作れる歌を、くりかえし〳〵声いとおもしろううたひ出たるに、……歌のこゝろはしらねども、武藤太はたえて詣つる人なしと思ひしに……欄のほとりに立出て見れば、年紀二八ばかりなる美女の都にも鄙にもあらぬ打扮して……女童只ひとりなん侍りけるに、真菅の筵布まはし、月に對て筑紫琴撩埒せる光景は、天津少女や影向しけん、龍宮の乙姫の人間に遊ぶかと疑れ、こゝろも蕩、魂も消ゆるはかりにおぼえしかば…。

右のように、武藤太と白縫が出会う場所は琴引八幡宮という設定、白縫の琴の演奏が武藤太を引き寄せている。

②『美濃旧衣八丈綺談』

『美濃旧衣八丈綺談』（五巻、文化十一年〈一八一四〉刊）は、浄瑠璃『恋娘昔八丈』の白木屋お駒と尾花才三郎の情話を元に作られた馬琴読本である。関連箇所、巻之四のあらすじは以下のとおり。

お駒の父である諸平は、妻がお駒を生んですぐに亡くなると、男手一つで育てることができず、また五月五日に生まれた子を忌む風習があったので、お駒を尾花才作の家に捨てる。才作は捨てられたお駒を拾い、実子である才三郎と共に育て、将来結婚させることにする。数年後、諸平は尾花才作が故主の仇であることを知り、お駒を取り返すことを考えるようになる。良案が思いつかないまま日々を過ごしていると、斉藤道三の嫡子である斉藤右近大夫義竜が、五月五日に生まれた子を忌み子として捨てたものは養い親に養育費を払って取り返すように命令を出し、諸平はお駒を取り戻す。しかしながら、才三郎を恋慕するお駒は別れを悲しみ、川一筋を隔てた尾花家の二階から才三郎が顔をださないかと、自宅の二階で尾花家を眺める日々を送る。お駒は毎日を泣き暮らし、琴を弾いて唱歌によせて才三郎への思いを伝えようとしていると、才三郎が現れる。しかしそれは夢の中の出来事であった。

女性が琴を弾いているところに男性が現れるという展開は、先ほど紹介した『椿説弓張月』第十二回と同じ。『美

濃旧衣八丈綺談[2]』巻之四本文は以下のとおりである。

関の小川も名詮自性、留められたる身はかひなくも、人伝ならで思ふ事、唱歌に寄せてしらせんとて、ひとり心を筑紫琴、膝のあたりへ引よせても、涙に咽て声たたず、仇浪のみぞかき鳴らす。十三絃の春の川、琴のしらべにひかれてや、来るともしらず我が背後に、立人あるを見かえれば、日來恋しきその人なり。

悲嘆にくれるお駒が琴を弾いていると才三郎が現れる。結果としては夢であったものの、琴の演奏によって二人が出会うという筋立てとなっている。

③『源氏物語』

古典の中でも有名な『源氏物語』「末摘花」にも琴に関する記述がある。

末摘花のことを聞いた光源氏は、彼女の父親が琴の名手だったので、娘も堪能に違いないと興味を示し、末摘花のもとを尋ねる。

『源氏物語[3]』「末摘花」には次のようにある。

故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ、心細くて残りゐたるを、もののついでに語りきこえければ、「あはれのことや」とて、御心とどめて問ひ聞きたまふ。「心ばへ容貌など、深き方はえ知りはべらず。かいひそめ人疎うもてなしたまへば、さべき宵など、物越しにてぞ語らひはべる。琴をぞなつかしき語らひ人と思へる」と聞こゆれば、「三つの友にて、いま一くさやうたてあらむ」とて、「我に聞かせよ。父親王の、さやうの方にいとよしづきてものしたまうければ、おしなべての手づかひにはあらじと思ふ」と語らひたまふ。

ここでは実際に琴が奏でられているわけではないが、琴に堪能であるという点が光源氏と末摘花とを結びつける切っ掛けとなっている。このように、古典作品の中にも琴を男女の出会いのなかだちとするものがあった。

『源氏物語』は『曲亭蔵書目録[4]』（文化五年〈一八〇八〉頃成立）に登載され、馬琴の考証随筆『燕石雑誌（えんせきざっし[5]）』（文化七年刊）・『烹雑の記（にまぜのき[6]）』（文政元年〈一八一八〉・同三年刊）などにその引用が多数みられる。馬琴は『源氏物語』に精通していたと見なしうるから、前述した『椿説弓張月』『美濃旧衣八丈綺談』の琴に関する物語には、『源氏物語』の影響があったと考えて良いだろう。

④『風土記』歌垣

歌垣とは、歌の掛け合いによって男女がそれぞれの思いを伝える、古代の行事である。『風土記[8]』「肥前風土記逸

文」には、歌垣の様子を伝える記述がある。本文は以下のとおり。

杵島の県。県の南二里に一狐山あり。坤のかたより艮のかたを指して、三つの峰相連なる。是を名づけて杵島と曰ふ。坤のかたなるは比古神と曰ひ、中なるは比賣神と曰ひ、艮のかたなるは御子神一の名は軍神。動けば則ち兵興ると曰ふ。郷閭の士女、酒を提へ琴を抱きて、歳毎の春と秋に、手を携へて登り望け、楽飲み歌ひ舞ひて、曲盡きて帰る。歌の詞に云はく、

あられふる　杵島が岳を　峻しみと
草採りかねて　妹が手を執る。是は杵島曲なり

毎年春と秋に、男女が酒と琴を持って山に登り、歌い舞って、曲が尽きたら帰る、というのが肥前国の歌垣のようである。馬琴に右の「肥前風土記逸文」についての知識があったかどうかは不明であるが、古代の歌垣の場、男女が出会う行事においても琴が用いられていたことがわかる。

以上、『椿説弓張月』『美濃旧衣八丈綺談』『源氏物語』の三作品、並びに『風土記』の歌垣を資料として、琴の持つ特性について論述してきた。琴が男性と女性との出会いに関わっていることが確かめられたものと思われる。続いて笛について考察していく。

三、笛

①『南総里見八犬伝』

『南総里見八犬伝』（文化十一年〈一八一四〉～天保十三年〈一八四二〉刊）は和漢の古典を下敷きにして作られた長編読本である。ここでは、『南総里見八犬伝』の主要典拠の一つ、中国の白話小説『水滸伝』を取りあげたい。

まず、図一、図二を見ていただきたい。図一が『八犬伝』第十二回の挿絵[9]、図二が『新編水滸画伝』（馬琴が翻訳した『水滸伝』）巻之一（文化二年〈一八〇五〉刊）の挿絵[10]である。両者を見比べてみると、絵の構図が似ていることがわかる。笛を持った童が牛に乗る姿、その横にいる人物、背景の岩や木など、『八犬伝』と『新編水滸画伝』とは似通っている。『八犬伝』の牛に乗った童は役行者で、『新編水滸画伝』の童は張天師である。両者とも不可思議な力を使って童に化けて登場している。

『八犬伝』に登場する役行者は、山で修業を行うことによって法力、呪力を得ていた。一方の『新編水滸画伝』に描かれた張天師は仙人である。仙人とは道教の教えに従い修業した人の中で術を使えるようになった人のことをいう。この二人がともに笛をもっていることから、笛は一般の人間を超えた不思議な力を象徴するものとして描かれていると考えうる。

図一　『南総里見八犬伝』第十二回

図二　『新編水滸画伝』巻之一

それでは『八犬伝』の本文を見てみよう。伏姫と役行者とが出会う箇所である。

『南総里見八犬伝』[11]第十二回は以下のとおり。

（伏姫は）流水にそふて綜麻形の、林がもとの菊の花、手折んとてぞ、二三町、裳濡らしてみ給ふ。浩処に乾なる、重山の根方に当りて、笛の音幽に聞えけり。伏姫耳を側て、あやしやこの山には、樵夫も入らず、山児も住ひせず、……思ひがけなく笛の音の、こなたを指て聞ゆるは、草刈もの、迷ひ入りしか。さらずは魔魅山鬼が障礙して、わが道心を試すにやあらんずらん。……且そのやうを見ばやとて、そなたに向て立給ふ。笛はます〳〵吹澄して、間ちかくなるまゝに、と見れば一個の蒭童、その年は十二三なるべし。腰には鎌と鑱を挿、鞍には両箇の籠を掛、手に一管の笛を拿り、黒き犢に尻を懸て、林間を出てあゆませ来つ、伏姫を尻目に懸て、なほ草笛の音をとゞめず

伏姫が山の中の川の近くにいると笛の音が聞こえてくる。伏姫は、草刈るものでも迷い込んだのか、もしくは魍魎の類なのかと怪しみながら、笛の音のする方へ行ってみると、そこには牛に乗り笛を吹く童、役行者の化現がいたのである。

②『新編水滸画伝』[12]初編巻之一、洪信と張天師が出会う場面の本文は次のとおり（句読点は筆者）。

松林の背にあたりて、笛の音隠々に響きしが、漸々にちかく聞えしかば、洪信ふかくこゝろ奇み、晴を定めてその方を見れば、一人の童子、黄牛にうち乗りて、当面に出来れり。其形状究て俗ならず、頭に両枚の了髻を紈ね、身には一領の青衣を被て、笛吹ならし行過るを

『新編水滸画伝』においても、張天師が化けた童子が笛を吹きながら現れることが確認できる。

③『教訓抄』

『教訓抄』（雅楽書。十巻。狛近真〈こまちかざね〉著。天福元年〈一二三三〉成立）には、先程紹介した『八犬伝』の場面と似通う箇所が見受けられる。同書巻之四第七「蘇莫者（そまくしゃ）」には役行者が笛を吹いて山を下る場面がある。九州大学所蔵本[13]には次のように記されている（句読点などは筆者による）。

蘇莫者

此舞ハ、昔役行者大峰ヲ下リ給ヒケルニ笛ヲ吹給ヒケルヲ、山神メデ給フテ舞ケルヲ、行見付ラレテ、舌ヲクヒ出シタルト申シ伝ヘタリ。件ノ出現ノ峰ヲバ蘇莫者ノ嶽（タケ）ト名付ケテ今ニ在リト云。

馬琴が『教訓抄』を読んでいたのかどうか定かではない

が、不思議な力を持つ役行者と笛の組み合わせは『八犬伝』以前に描かれていたことが知れる。

④『義経記』

次に『義経記』（室町時代初期成立）を取り上げたい。『義経記』巻第三に描かれる笛に注目する。源義経と弁慶が初めて出会う著名なシーンである。弁慶が、どこからか聞こえてくる笛の音の方へ行くと義経がいる。義経は『六韜』という兵法書を読むことによって不思議な力を備えている。そのため、大力の弁慶は義経と戦い、あっけなく敗れて義経の家臣になる。『義経記』でも、笛は義経の、一般の人間を超越する力を表すものとして使われている。

『義経記』[14]巻第三の本文は以下のとおりである。

弁慶洛中にて人の太刀を奪ひ取る事

六月十七日、弁慶五条の天神に参り……よき太刀持ちたる人をぞ待ちかけたる。

暁方になりて、堀川を下りに来ければ、面白き笛の音こそ聞こえけれ。……笛の音の近づきければ差し屈みて見れば、若き人の白き直垂に胸板白くしたる腹巻きに、黄金作りの太刀の心も及ばぬを佩かれたり。……「さては見参に入らん」とて、大太刀を抜いて飛んでかかる。御曹司も小太刀を抜いて、築地のもとに走り寄り給ふ。……御曹司走り寄りて……九尺ばかりありける築地にゆらりと跳び上がり給ふ。弁慶いたく踏まれぬ。鬼神に取られたる心地して、呆れてぞたちたりける。

弁慶義経に君臣の契約申す事

明くれば六月十八日なり。……御曹司夜更けて、清水の坂の辺にまた例の笛こそ聞こえけれ。

弁慶、「あら面白の笛の音や、さればこそ」と思いて……御曹司太刀抜き合わせてかかり給ふ。弁慶が大長刀を打ち流したる腕の上にゆらりとぞ越え給ひける。……御曹司走りかかりて斬り給へば、弁慶が弓手の脇の下に太刀の切つ先を打ち込まれて、ひるむところを、太刀の背にて、散々に打つ。東枕に打ち伏せて、上に上り居て、押さへつつ、「さて従ふや否や」と仰せられければ、「これも前世の事にて候ひつらんめ。さらば従ひ参らせ候はん」と申しければ……その後連れて京へおはして、平家を狙ひけり。

右のように、弁慶は「鬼神に取られたる心地して」、「散々に打」たれて、笛を吹きながら現れた義経に従うことになる。

⑤『四天王剿盗異録』

右に紹介した『義経記』と同じような話が、馬琴読本『四天王剿盗異録』（前・後編十巻十冊、文化三年刊）にも

見える。同作前編巻之五には、後に有名な盗賊「袴垂の保輔（はかまだれのやすすけ）」となる、引剥を業とする「弥介」が、笛を吹く「藤原保昌」を襲おうとして手を出せず、保昌に従うという話が載る。図三が同場面の挿絵である。

挿画の、左が「藤原保昌」、右が「弥介」（袴垂の保輔）。「弥介」が笛を吹く「保昌」を襲う機会を伺う様子が描かれている。

『四天王剿盗異録』[16] 本文は以下のとおり。

摂津の前司藤原保昌は…おぼろかなる月を賞して、ひとり笛吹てゆきもやらずねりゆけば、弥介はやりすぐして走りかかり、その衣剥んと思ふに、物おそろしく覚ければ、二三町ばかり後ろにそひ行けども……笛を吹きながら見かへりたるけしき、とりかかるべうも覚えざれば、又走り退ぬ。……保昌…又はじめのごとく笛を吹て行。弥介は鬼に神とられたるやうにて、共に醒が井まで行けり。

『四天王剿盗異録』においても、『義経記』の義経と同じように、笛を吹く保昌は不思議な力を発揮している。

⑥『十訓抄』

『十訓抄』にも笛に関する説話が載る。源博雅が鬼の笛を得る話である。あらすじは次のとおり。

図三　『四天王剿盗異録』[15]

源博雅が月夜の晩に朱雀門で笛を吹いていると、自分と同じような格好の男が美しい音色の笛を吹いていた。この出会いの後、二人は月夜になると笛を吹きかわすようになる。ある時、源博雅は、相手の吹いている笛がとても美しい音色だったので、自分の笛と相手の笛を取り換えてもらう。二人は交換した笛を吹き続け、源博雅は笛を返さないまま死んでしまう。後に、浄蔵という笛の名人が博雅の笛を吹くことになり、博雅と同じように朱雀門の前で笛を吹いていると、門の楼上からとてつもなく大きな声で「最高の優れ物だ」という賛嘆の声が聞こえてきたので、博雅が借りた笛は鬼のものであったことがわかる。『十訓抄』[17]十の二十「博雅三位 朱雀門の鬼の笛」本文は以下のとおりである。

博雅三位、月明かりける夜、直衣にて、朱雀門の前に遊びて、よもすがら、笛を吹かれけるに、同じさまに、直衣着たる男の、笛吹きければ、……かの人の笛の音、ことにめでたかりければ、こころみに、かれを取りかへて吹きければ、世になきほどの笛なり。そのの、なほなほ月ごろになれば、行きあひて吹きけれど、「もとの笛を返し取らむ」ともいはざりければ、ながくかへてやみにけり。……その後、浄蔵といふ、めでたき笛吹ありけり。召して吹かせ給ふに、かの三位に劣らざりければ……月の夜、仰せのごとく、かれに行きて、この笛を吹きけるに、かの門の楼上に、高く大きなる音にて、「なほ逸物かな」とほめけるを、「かく」と奏しければ、はじめて鬼の笛と知らしめしけり。

美しい笛の持ち主が実は鬼であったというこの話も、笛を持って現れる者がただ者ではないことを示す物語といえるだろう。

以上六作品、『南総里見八犬伝』『新編水滸画伝』『教訓抄』『義経記』『四天王剿盗異録』『十訓抄』に描かれる笛の役割について考察してきた。どの作品においても、笛を持つ者は不可思議な力を有していた。笛は人を超越する力を象徴するものとして描かれていると考えて良いと思われる。

四、おわりに

本稿では、琴が男性と女性との出会いに関わっていること、笛は人を超越する力を象徴するものとして描かれていること、以上の二点について論じてきた。馬琴作品は和漢の多くの古典を下敷きにしているので、今後は、日本・中国の古典や江戸期の芸能等、調査の範囲を広げ、物語や芸能において笛や琴がどのような役割を果たしているのか、さらに考察を加えてみたい。

注

（1）『椿説弓張月』（『椿説弓張月上』、後藤丹治校註、岩波書店、昭和三十三年）
（2）『美濃旧衣八丈綺談』（『馬琴中編読本集成』第十六巻、鈴木重三・徳田武編、汲古書院、平成二十一年）
（3）『源氏物語』（『源氏物語①』、阿部秋生ほか校注・訳、小学館、一九九四年）
（4）『曲亭蔵書目録』（『日本古典文学影印叢刊三十二』、財団法人日本古典文学会、平成元年）
（5）『燕石雑誌』（『日本随筆大成』〈第二期〉十九、昭和五十年）
（6）『烹雑の記』（『日本随筆大成』〈第一期〉二一、昭和五十一年）
（7）『玄同放言』（『日本随筆大成』〈第一期〉五、昭和五十年）
（8）『風土記』（秋本吉郎校注、岩波書店、昭和三十三年）
（9）『南総里見八犬伝一』（濱田啓介校訂、新潮社、平成十五年）
（10）『新編水滸画伝』（早稲田大学図書館所蔵本）
（11）注（9）と同じ。
（12）注（10）と同じ。
（13）『教訓抄』（九州大学所蔵本、国文学研究資料館が公開するデジタル資料）
（14）『義経記』（梶原正昭校注・訳、小学館、二〇〇〇年）
（15）『四天王剿盗異録』（『馬琴中編読本集成』第三巻、鈴木重三・徳田武編、汲古書院、平成八年）
（16）注（15）と同じ。
（17）『十訓抄』（浅見和彦注、小学館、一九九七年）